

企画調査委員会ニュース

東日本大震災 10 周年シンポジウムの開催報告

2021 年 3 月 13 日（土）と 3 月 27 日（土）の 2 日間にわたり、東日本大震災 10 周年シンポジウムがウェビナー形式で開催された。

第 1 回は「福島復興の実像と虚像」と題し、広域避難・除染・制限解除・帰還（移住）といった福島原発事故 10 年の経緯と課題、そして展望について議論が行われた。川崎興太氏（福島大学）の基調的講演に続き、窪田亜矢氏（東京大学）の実践型研究を通じた「不可能で必要な責務としての空間計画」、今井照氏（地方自治総合研究所）の「『復興』の蹉跌-『原発避難論』再論」の講演がなされた。休憩後、佐竹浩氏（福島県庁）から復興施策を担われた県庁職員の視点からの報告、西崎芽衣氏（一般社団法人ならはみらい）から移住の視点も交えた福島復興の報告、また加藤孝明氏（東京大学）から報告を踏まえたコメントを経て、全体ディスカッションでは「都市計画」というアプ

ローチの意義、また「虚像」に込められた意味について会場コメントも踏まえて議論がおこなわれた。約 350 名の参加があった。

第 2 回は宮城・岩手沿岸を対象に「津波災害からの被災地復興と都市計画が果たした役割」として 3 時間半にわたり開催した。岸井隆幸氏（日本大学）は当時学会長であった立場から、復興初動段階において都市計画学会と都市計画はどう機能したのか、具体例をもとに基調報告を、菊池雅彦氏（国土交通省）は津波被災からの市街地復興事業の実績と被災者意向を踏まえた計画論について事例も交えて報告、また樺島徹氏（元復興庁統括官）は、録画登壇として都市計画に期待された役割と都市計画法制度の論点を、そして姥浦道生氏（東北大学）は実際の現場支援や調査の経緯から、市街地復興の計画・事業論について報告を行った。休憩を挟み、牧紀男氏（京都大学）は、南海トラフ巨大地震対策へ継承されつつある教訓とその取り組みを踏まえた論点を提示し、また近藤民代氏（神

戸大学）は災害復興研究の視点から被災者再建と復興空間に関するコメントをおこない、それを受けて、津波シミュレーション技術による防災基盤構造物と土地利用の計画技術の到達点、平時と災害時の都市計画に通底するもの／固有のものといった内容について議論が行われた。約 300 名の参加があった。全 2 回を通じて出口敦会長から開会挨拶を行い、第 2 回閉会挨拶では森本章倫副会長より、都市計画学会として気候変動への対応も含め、災害復興と都市防災について、学術と課題解決のネットワークを広げる活動を促進していくことが宣言された。

本シンポジウムの当日公開資料、報告・討論記録は本会ホームページに掲載予定である。また本シンポジウムは、本誌 349 号の「特集：東日本大震災、復興 10 年の到達点とこれから」の編集発行と連動している。学会ホームページのシンポジウム報告資料と合わせて、ぜひ特集号も購読いただきたい。

（市古太郎，東京都立大学）